曜変の人 ── 岩城克明先生の想い出 ──

経済学研究科委員長　戸　沢　行　夫

昨年、岩城克明先生の突然の訃報に接したとき、驚きはもとより、その若さと将来を想い悲しみがこみあげた。岩城先生にはご専門の数理統計学を大学院で担当していただくべくお願いし、快く引き受けていただいた。門外漢のわたくしには詳しい内容は解らないが、当時の講義概要には「ベイズ統計学の考え方を習得することに重点をおく」と記されている。学会でも「The International Society for Bayesian Analysis」なる国際学会に所属されておられ、日本におけるベイズ統計学の普及、発展に情熱をもっておられたようである。しかし残念ながら、大学院での受講者はなかったように記憶している。ただ、委員会への出席の折には、率直で的確な正論をのべておられたのが印象に残っている。

わたくしは個人的に岩城先生にはいくつかの印象深い感慨をもっている。大学は平成16年度から新しいカリキュラムのもとで新入生を迎えることになり、わたくしたちは入学直後の学生に対する演習運営の内容を考えなければならなかった。岩城さんの提案は意外にも「日本語を声を出して読む」ことを説かれたものであった。つまり＜音読＞の提案であった。わたくしは江戸、明治の知識人たちが漢学学習の手はじめとして素読を重視したということを思い出しながら、なるほどそれは学問・素養の基本かもしれないと思いながら、結局、実現にはいたらなかった。その後、日本語を声を出して読もう、＜音読＞のすすめが社会的にも話題になってきたのである。

もうひとつは、あるとき「先生、うまい日本料理でも喰いに行こう」と、突然のお誘いである。日本経済史を担当する歴史屋への軽いお声かけかもしれないが、なにか美しく繊細な味わいをもとめる岩城さんの心情を感じたのである。これもわたくしの不如意で実現にいたらなかった。実現できていれば、旬の香りのする色味美しい料理を味わいながら、けっこう普段できないような話に花が咲き、たのしい時間をもてたかもしれない。

そしてもうひとつのエピソード。岩城さんが亡くなられて後、ある先生と想い出ばなしをしていたところ、その先生が岩城さんに戴いたのだと、包み紙の中からきれいな茶碗をみせてくれた。それは全体が淡い空色で、星のような斑文が浮かんでいた。一見すれば、それは可愛い少女趣味の茶碗ではあるが、美しく繊細で趣味のよいものであった。この茶碗をみたわたくしはちょっと気持ちが高揚した。岩城さんが実際にご覧になっているかは知るよしもないが、それは明らかに静嘉堂文庫美術館が収蔵する「曜変天目茶碗」を模倣したものであったからである。

この美術館は旧三菱財閥の岩崎弥之助、小弥太が収集した美術品を収蔵、展示しており、その中には国宝クラスのものがいくつかある。この茶碗はその代表格であった。中国南宋時代（12～13世紀）に福建省建陽県の建窯で焼成された茶碗で、世界に3個、すべて日本にあるが、その中でも逸

品である。それが江戸時代に日本の徳川将軍家に伝わり、3代将軍家光から淀藩主稲葉家が拝領し、昭和9年に岩崎小弥太の所蔵に帰したものという。「曜変」は「窯変」「容変」をも意味するという。また、「曜」は「星」あるいは「輝く」を意味しており、全体に深い黒曜にやや青白く星のごとく怪しく輝く斑文の美しさは、吸い込まれるようで、目が点になるほどに凝視してもあくことがない。わたくしは数回この茶碗をみる機会にめぐまれており、岩城さんが友人に贈られた茶碗を拝見したとき、「曜変天目茶碗」を想い出し、なんか胸が熱くなった。そのとき、彼のちょっと厳つい風貌とはちがう、深遠で細やかな心配り、繊細でやさしい一面をみた思いで、わたくしはこれが「彼なのだ」と確信したのである。わたしたちは岩城先生のそうした側面を見すごしてきたのではなかろうかと、あらためて寂しさがこみあげていた。

岩城先生のなんともはやい夭逝は慚愧としかいいようがない。すでに幽明境を異にするが、岩城先生には新しい場をえられ、「曜変」して、深くひろい天空でキラ星のごとく輝いておられるのではなかろうか。

合掌